

国際農業ジャーナリスト大会に参加して

臼井道雄 (米 3 / S 3 2)

ハイライト:

- ・ [ハーベストパーティーアルバム](#)
- ・ [I F A J 大会レポート](#)
- ・ [イベント案内](#)

目次:

ハーベストパーティー	2
I F A J 大会レポート	1・4
平成 19 年度帰国報告	6
会員便り	8
サンクスパーティー	9

■ 最近農業・食糧問題を勉強しはじめたので世界の農政ジャーナリストはどんなことを考えているのか興味があり、東京のオープニングセレモニーにボランティアで参加した。村田さんがこの大会の事務局次長であったのでご配慮していただき年相応の仕事を振り向けてもらった。私は東京農業大学内の大会準備のお手伝いと学園の中で行なわれた日本伝統の相撲、弓道、茶会、生花(草月流)に随伴した。二日間農大に通った。

伝統行事のグループは夫婦同伴で 40 人強、2 班に分けて見学した。農大の風呂敷が全員にプレゼントされたが、日本の生活習慣を理解してもらうのに説明しやすく気の利いた贈り物と思った。農大の相撲部は強く幕内力士を沢山輩出しているので関心があった。殆ど海外でも相撲を知らない人はないと思うが熱心に見ていて、なかなか離れようとしなかった。弓道部の練習では女性も結構居り元気にやっていた。「礼に始まり礼に終わる」、弓道に限らず礼を重んずるのは日本伝統か。茶会場は売店の片隅にセットされたがデモンストレーションを見る人は半分くらいだった。通訳もよくなかった。しかし階上での生花の話しには通訳が上手だった。全員が参加して草月流の生花を植えたが皆マスター出来たように上手に花を挿していた。

■ 講堂では農林省から大臣代理で佐藤審議官が講演した。パワーポイントで講演は進められたが、同時通訳が入るので倍の時間がかかった。2015 年までに日本の自給率を 45% にすることを目標にしていると話していたが、最近 39% 台に落ちてしまい、目標達成に危険信号が灯っている。

パーティに先立ち校庭で餅つきを実演していたが、外人が杵で上手に餅をついていた。基本的に農業をやっている仲間であるからかと感心した。

■ この後宮城、山形、岩手の農家にホームステイして取材する大会だったが、今回の日本開催は 50 年振りだそうで意義ある大会であった。私は暫く農業に疎遠だったのだがこの 2 日間に新しい感動を頂きました。外人記者から「どうして儲からない米の生産を続けているのか?」と質問されたそうだが、日本農業はペイしない米に何時までも執着してはいけなと思います。緑の革命によりアフリカでも単収の高いコメ(ネリカ米)ができるようになっており、グローバルゼーション化した昨今では頭の切り替えが大事ではないかと思う。

地産地消シンポジウム

12月6日(木)
10時~17時

国立オリンピックセンター
カルチャー棟 大ホール

主催
(社)国際農業者交流協会



農大生協食堂前でイベント準備中



百周年記念講堂での総会受付の様子

I F A J 大会レポートは 4 頁へ続きます →

ハーベストパーティーアルバム

10月21日(日) 藤森農園



Here we go!







芋煮交流会の様子



シルク和紙漉き体験中



棚田にて質問攻めにあるハルゾウさん



メイクアップ中のフィシュラー氏

『国際農業ジャーナリスト連盟 世界大会』を終えて

まるもり 水とみどりの百貨店 てんちょう 早川真理（スイス/H7）

■村田さんがとんでもないところに飛び込んだおかげで、丸森町もとんでもないことになってしまいました。

9月20日（木）、まだ残暑が厳しい丸森町に、60名近い農業ジャーナリストおよび関係者のみなさんがやってきました。私たちの町では、カナダ研修生でもある若き酪農家が営む（有）半澤牧場と、町内で唯一農業法人をとっている稲作農家（有）せいてんの2軒が取材対象となりました。

私はお昼の『芋煮交流会』のスタッフとして準備をしていたので、取材同行はできなかったのですが、半澤さんの後日談ですと「質問攻めで具合が悪くなった」とのことでした。それくらいみなさん真剣に取材してくださったと思うと感謝です。

交流会は町内の農業関係者のみなさんにもお集りいただき、町内随一の景勝地『不動尊公園キャンプ場』にて開催されました。東北の秋の風物詩である“芋煮会”も、もちろん取材対象。宮城風（味噌仕立て+豚肉）・山形風（しょうゆ仕立て+牛肉）2種の鍋に新米のおにぎり、同期のオランダ研修生 岩崎暁さんのチーズなどが振舞われました。1時間はあっという間で（町長の挨拶が長すぎた...）、各グループには地元の通訳者をつけたのにも関わらず、ほとんど交流ができなかったようで残念でした。

■丸森ではもうひとつイベントを仕掛けました。キャンプ場から公園内を歩いて不動尊クラインガルテン（私の住まいでもあります）に移動し、クラブハウスのホールで地元の技を見ていただくべくセットしました。ワラ細工・まゆ細工・和紙漉きなど、興味があるものを体験してもらい、出来上がった作品はおみやげとして持ち帰っていただきました。稲作や干し柿作り、養蚕などの工程もパネル展示しました。布ぞうりなどの販売も同時に行い、大変好評でした。

.....

■「丸森もぜひ会場にしてください！」と言った手前、この夏は、大会の準備で明け暮れるだろうと覚悟していましたが、優秀な役場職員が動いてくれたおかげで私は事前準備以外ほとんどノータッチですんでしまいました。その分、物足りなさが残ったのは事実ですが。仕事とは別に、最終日の仙台でのシンポジウムに参加したところ、事務局に「いいところに来た！」とつかまり（本当は村田さんたちと食事がしたくて早めに行ったのですが...）ワケガワカラナイうちに、参加者でパネリストでもあった元E U農業委員フィシュラー氏の付き人をさせられることになってしまいました。村田さんからの「うちの研修生はなんて使えるんだ〜」というお褒めの言葉と、おみやげのチョコプレッツェル（不味かった...）がご褒美でした。フィシュラー氏からコーラもごちそうになったので、これが最高のご褒美ですね（小学生か...）。

■テレビの取材も入っていたので、日本棚田百選のひとつである大張沢尻棚田のハルゾウじいちゃんが画面に映ったときは、なんだか涙がこぼれそうでした。取材陣から「後継者はいないのか」「大変じゃないのか」などと質問攻めにあったハルゾウさん。暑い中、汗だくになって草刈りしながら遅れた参加者たちを待っていたのです。85歳になる現在もなお、棚田を守り続けています。どうして日本人がここまで米にこだわるのか。海外のジャーナリストたちにほんの少しだけわかってもらえたような気がしています。

お国に戻られたみなさんが、どんな記事に仕立て上げてくれたのか興味津々です。少しずつホームページを探してみたいと思っています。

ということで、ハヤカワのつぶやき（ぼやき？）の入ったレポートでした。このようなチャンスを与えてくださった村田さんに、改めて感謝申し上げます（ついでに作文もかよ...）。



2007年国際農業ジャーナリスト連盟日本大会のお手伝い

佐々木忠弘（米2/S53）

■派米研修同期生の村田正兄が実質的に現場責任者を務めた標記大会に同兄の依頼でボランティアとして参加し、裏方として、主に翻訳、通訳、会場案内などを数日間、東京と地元・宮城県で務めました。

大会は、9月17日朝から19日午前の3日間が東京やその周辺で、9月19日午後から22日夕方の4日間が宮城県やその周辺で開催され、私は、大会開催前の準備、東京での年次総会やその前後の諸行事、仙台市での国際シンポジウムなどに参加し、国内外のジャーナリストという、これまであまり交流（縁）がなかった好奇心の塊のような人たちと、舞台裏や懇親会の場で知り合い、裏方活動の傍ら、いろいろな話をしました。

■外国からの参加が、30か国近かったと記憶していますが、この内、カナダ、ドイツ、オーストリア、ポーランド、ノルウェー、バングラデシュ、スペイン、オーストラリア等からの農業ジャーナリストや東京農業大学を会場とした諸行事の際に知り合ったタイ人留学生などと話す機会がありました。

特に印象深かったのは、タイ人留学生と昨年、軍部のクーデターで英国亡命に迫られたタクシン前首相の評価についてでした。タクシン前首相は、携帯電話会社の経営で大成功し、その豊富な財力で総選挙を勝ち抜き、貧困対策や経済成長策が国民の圧倒的な支持を得て、アジア通貨危機で疲弊していたタイ国の経済を再建した立役者です。こうした民主的な選挙で選ばれた首相が民意に反して、軍という超法規的な存在に政権の座を追われたことを、バンコクの富裕層出身の彼が支持していたことに驚きました。金権政治には、経済成長の恩恵を最も受けていると思われるタイ国の富裕層でも拒絶反応が強いということでしょうか。

■バングラデシュの参加者からは、私が、国際協力機構（JICA）派遣での海外援助の仕事が長く、バングラデシュの政情にも詳しくあったこともあり、昨今のバングラデシュの政治的な混乱（軍と政治家が対立し、非常事態が宣言）などについて、現地の生の情報を聞くことができました。途上国でのJICA勤務では、相手国政府機関に配属になることが多く、中立性の保持や内政不干渉という観点から、派遣される日本人専門家は、相手国の人間との間では、政治的な話は原則的にタブーですから、こうした話は、現地ではできないのが一般的です。

■また、私がエリトリアというアフリカの小国での勤務を終わったばかりであることや、私の家内がベトナム出身で、普段、私の一家は、ベトナム南部のホーチミン市に居住していることを話すと、日本人参加者も含め、皆な興味津々、いろんな質問をしてきました。エリトリアに関しては、未知の人が多く、国情や日本の援助内容などについて訊かれ、ベトナムに関しては、話をした日本人ジャーナリストの大半が、一度は訪問した経験があることから、現在の経済状況や、それぞれが訪問時に感じていた疑問点などについて訊かれました。中には、メコン河に夕日が沈む光景を見たいが、可能かどうかという特異な質問もありました。

その上、宮城県での行事を手伝っていたとき、地元の大学の1年後輩で、学生寮で生活を共にした同窓生（宮城県での受入責任者！）や私の青年海外協力隊参加の手助けをしてくれた旧知の県職員と20数年ぶりに再会するという奇遇もありました。このように、短い期間に、国内外の多くの人々と交流し、旧友と再会できたことは、人生のよい刺激にもなりました。（了）



蔓細工の指導をする先生



あまりの暑さに想定外の水浴び



お蚕さんも登場

写真提供：早川真理



農作業のパネル展示



シンポジウムの様子



楽屋裏で談笑するパネリストたち

平成 19 年度帰国報告

米二研修報告書 第二回

山下昌幸 (米 2 / H 1 6)

■二年間の渡米研修全般

a) 米国農業と日本農業の短所、長所

米国農業は規模が大きいというのが、まず長所の一つですが、規模が大きいために、廃棄物の処理が不透明になっている気がします。廃棄物のみではなく肥料過多や農薬過多といった問題もあるでしょう。アメリカは大量生産、大量消費の国で、その為に土地にはかなりの負担が掛かっていることだと思います。それに肥料過多や農薬過多で地下水に問題が起きているようです。国土が広いために気候も違って、一年中同じ食材が店頭には並ぶのが、もう一つの長所ではないでしょうか。日本は、アメリカのように国土があるわけでも無いですが、国土のわりに人口が多い国でしょう。そして食べ物のニーズも多い、その食を満たすために輸入に頼っていることが、まず短所の一つだと思います。安さと安定供給のためなのでしょうが、季節の野菜を食することが日本の文化の一つなのではないでしょうか。このまま輸入に頼っていては農業に関わらず、日本全体が弱体化してしまうと思うのですが、ニーズがあるということはサプライも減ることは無いでしょう。

b) 日本農業者と比較した米国農業者

日本の農業者との比較は出来ませんが、僕が感じた米国の経営者というのは、自分は正しいと胸を張って言えている気がします。また、そのための努力を怠らずに、すごく自信に溢れていました。それに、自己中心的な考え方をしている気がします。僕は自分に自信が無いので、そう感じたのかも知れませんが、経営者たるもの動揺してはいけません、毎日、ポーカフェイスでいなくてはいけないような気もしました。

c) これからの日本農業のありかた

今まで僕は、農業というものは環境に良いものだと思っていましたが、実は農業も環境破壊の一つなのだと感じました。多量の肥料の使用や、処理されていない堆肥の散布による海への影響があること等。このままでは大地は枯れ果て、海には魚がいなくなると思いました。そうならないためにも、これからの農業は変わっていく必要があると思います。土地の特性を生かし、土地にあった農業をし、季節の野菜を作り、より自然に近い農業を心がけることが大切です。土地に無理をかけるような農業では無く、作物、果樹、家畜が持つ力を手助けするような農業。日本の食文化が絶えないように、自然にも気を使っていかなければいけないと思います。

今、米国ではエタノールをトウモロコシから作っていますが、その影響でトウモロコシの値段が高騰し、生産者が一斉にトウモロコシ生産に切り替えた為に、ほかの作物まで値段が高騰しています。いまや輸入大国の日本が影響を受けるのは目に見えています。すでに、その影響はちらほら出てきていることでしょう。そこで僕が思うのは、日本が外国に頼らない農業をしていかなければいけないと思います。安いからと言って輸入に頼っているのは、日本農業の基盤が弱くなってしまうのではまいでしょうか。でも、一つ疑問なのが、「どうして海を越えてやってくる作物が安い」のでしょうか？普通は逆なのではないでしょうか？アメリカの食材は日本に比べると、べらぼうに安いんです。それは作り手(面積)が多いせいでしょうが、それ以前に自国の食物は自国でまかなうという姿勢があるのではないのでしょうか。

日本は外食産業の発展により食生活が外食に頼るという感じがありますが、それが、そもそも間違いなのではないのでしょうか？現在の外食産業は安さを売りにしているところも多いですが、では何故に安く提供出来るのでしょうか？そこで使われている食材の大半が輸入でまかなわれているからなのでしょう。「安いから輸入野菜を使う」では無く、自国で作る、自国で消費する。農業と産業が一体化していけば、より良い日本農業が見えてくるのではないのでしょうか。今より作物の値段は上がったとしても、これからの日本の基礎を固めるためには必要なことだと僕は思います。値段だけを見るの



ではなく先のことも視野に入れるという考え方を国民一人ひとりが持ち、また、個人の収益のみを考える輩を玉砕していかなくてはならないと思います。日本人が日本人で在る為には、日本人が手を取り合って国民全体で日本の未来を考えていかなくてはなりません。やれ農業だの、やれ工業だの産業だのと言っても結局は、全て同じ穴のムジナですから、全てに共通するものがあり、全ては一つのサイクルの中に納まっているものだと思いますから、それぞれが協力し合い、話し合いをしていくことで何か打開策が生まれるのではないのでしょうか。

それに僕は日本の季節感が好きです。季節の野菜も好きです。毎日、同じものが店頭にあるという常識を国民の頭から取り除いていき、日本に季節感を取り戻しましょう。アメリカのようになってはいけません。日本は日本というように、古来の侍のように鎖国とまではいかなくとも、今の時代、それに近いことも必要なのではないのでしょうか。日本の国には外国製のものが溢れ、食べ物も欧米化し、いったい日本はどこに向かおうとしているのでしょうか。このままでは日本という名の外国になってしまうのではないかと思います。日本の文化を大切に誠実に生きること、それが日本農業の発展に繋がって欲しいと思います。農業は世界を救う火種になりうるものだと僕は思っています。農業の素晴らしさを色々な人たちに伝え、良いものを作り消費者に受け入れやすいものを我々が作っていく。そうすれば自然と輸入物の作物は姿を消し、日本農業物が日本に溢れ農業も活性化していくように思います。それに、作物を作り出すために関わる諸々の値下げをし、そして、なるべくダイレクトに消費者に届くようにすると良いのではないのでしょうか。

d) 二年間の研修結果

少しは成長したような、していないような感じです。でも、お金の大切さや、生きていくことの難しさが身にしみて感じられたように思います。渡米前の僕は、物事を簡単に考え過ぎていたように思います。でも、親から離れてアメリカという国で、言葉も分からず仕事をして研修寮での自炊という生活で学んだことは、普通の生活を送る大切さと難しさだと思います。自分が行動しなければ何も始まらない。一日、何かを怠れば、それが自分に帰ってくるということ。僕は頭が良いほうではありません、しかし何か日本のためにやれることがあるのなら一生懸命に頑張りたいと思っています。そして僕は農業と出会い、アメリカで二年間農業に触れ、アメリカの文化に触れ、また日本を違う視点から見たときに、「やっぱり自分は腐っても日本人だな」、「自分は日本が好きなのだ」と思いました。

いかんせん力不足ですが、これからは地に足をつけて、自分自身をより磨いていこうと思います。二年間は長いようで短かったです。でも、ものすごく色々なことを考えることが出来ました。日本人としての誇りを見つけられたし、日本人として日本のことを、もっと勉強しなくてはいけないとも思いました。二年前の、あの日にアメリカに来ていなければ僕は、こんなことなど考えていなかったと思います。

e) 帰国後の計画

北海道の酪農場への就職を考えています。渡米前は肉牛農家になりたいと、ただそれだけ思っていたのですが、最近、考えが変わってきました。確かに、肉牛農家に憧れはありますが、いずれ出来れば良いことなので、少し遠回りしていこうかと思っています。酪農家で働きつつ肉牛農家になる為の貯金と勉強をし、10年先か、20年先かは分かりませんが、自分の牛を飼えれば良いと思っています。その為に、まず自分の基盤をしっかりと作り上げたいです。





ミヒャエル・ロート議員
<http://www.michael-roth.eu/>

画像元：
<http://www.schulserver.hessen.de/wildeck/blumenstein/webseiten/aktuelles/europatag/>



EU連合
<http://www.deljpn.ec.europa.eu/>

会員便り

東京 F I A 副会長 安田弥生（スイス/H9）

私にとって思いがけない経験を 10 月に交流協会より与えてもらいました。

ドイツの国会議員のミヒャエルロートさんがうちの農場に見学にやってきました。日本の企業などよりも有機農家や動物福祉的なことをしている所に行きたいと言う彼。しかも若い！！しばらくぶりのドイツ語にたじたじでしたが、彼の愛らしい性格にすぐに打ち解けられました。

彼がもっとも興味を持ったのが田んぼ、けれども日本の米価の安さに驚き、しかも田んぼや畑の規模の小ささにも驚いてました。それよりなにより羨ましいのはドイツの話を聞いたところ、有機農業を増やしていく政策により、自然に優しい農業をすればするほど儲かるとのこと。また今はドイツと言うより EU としての政策が変わったのもあり、EU 全体で言うと自給率が高いと言う現実が、有機に転換することで収穫量が減ることに不安がないというものなのだなと、感じました。

そして、私の田んぼの脇にある、小さい川を見て言いました。『ドイツでは今、アスファルトなどを壊して自然に戻すようにしていくんだ』と。それに驚いた私はおもわず、「えー素晴らしい！！ここなんて来年川を真っ直ぐにする工事が行なわれるんですよ。」と答えると、ドイツ語で「それ子供の靴だよ」と???

あとから考えると、なるほどすぐ成長して履けなくなる子供の靴に例えているのだとわかりました「日本もそうなると良いのにな」と言うと、彼も「君のような考えの日本人がいたという報告ができるよ。」と帰っていきました。

わずか数時間の滞在でしたが、私の近くにある牧場にも案内することでもできて本当にまたとない経験をさせていただきました。これもスイスに行かせてもらったことのおかげなのだと感謝しております。

■ 編集後記

今年度の研修生募集が終了した。本会からの推薦はヨーロッパ研修が 1 名という結果となった。昨年、協会の募集要項が改正され、これまでの「各県推薦」という必須条件がなくなり、新農業人フェア、ホームページなどを通じて協会に直接応募できるようになったことが大きく影響している。

埼玉県でのブロック会長会議の場において、某県の担当職員から「知事の推薦を受けた者が中央選考で落ちてしまうことがあるが、それでは『知事の推薦』とはどんな意味があるのか？」という疑問が投げかけられた。多くの県では、この様な形で「知事推薦」をしているのは私たちの事業だけらしい。協会へ直接応募できるシステムは、参加希望者を増やすことにはならず、かえって「県の推薦」という面倒な手続きをスルーしてしまうだけの効果しかないのではないだろうか？県の担当者にいらぬ心配をかけているようでは、日頃、事務局として手弁当てで事業に協力して下さっている方々に申し訳ないような気もするが・・・このまま直接応募が増えつづければ「組織の選考」そのものがなくなり、OB・OG との関係が希薄にならないか心配である。（村田）



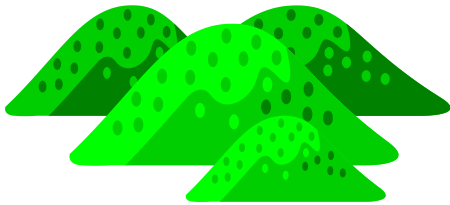
- 編集発行 -
 東京国際農業者協会
 〒144-0052
 大田区蒲田5-39-2-6F
 (社) 国際農業者交流協会内
 TEL: 03-5703-0254
 FAX: 03-5703-0255
 E-MAIL: farm@planet.nifty.jp
 発行責任者: 村田 正

見上げれば高尾山 ごはんや 風

サンクスパーティーのご案内

早いもので今年もあと一月あまり。この一年間、皆様にとってどんな年だったでしょうか？恒例のサンクスパーティー、今回は趣向をかえて安田さんのお母さんが経営する高尾駅前の「ごはんや風」で行います。安田さん自慢の風の畑で採れた新鮮野菜を「おふくろの味」でいただきます！！

みんなで高尾山ハイキングを楽しんでからパーティーに参加するのも良いですね。皆様のご参加、お待ちしております。



開催日：12月9日（日）

開始時間：午後3時～

会場：ごはんや 風

所在地：東京都八王子市高尾1607
アクセスについては裏面をごらん下さい

参加費：4千円

申込締切：12月5日（水）

高尾山ハイキング（オプションツアー） 雨天中止

当日、午前中に集合して高尾山へのハイキングを企画しています。

参加ご希望の方は、申込書にご記入ください。費用は自己負担となります。

詳細は参加申込いただいた方に直接ご連絡いたします。



サンクスパーティー 参加申込書

☐ 参加します

☐ 参加できません

高尾山ハイキング

☐ 参加します

お名前

連絡先

男性

女性

人

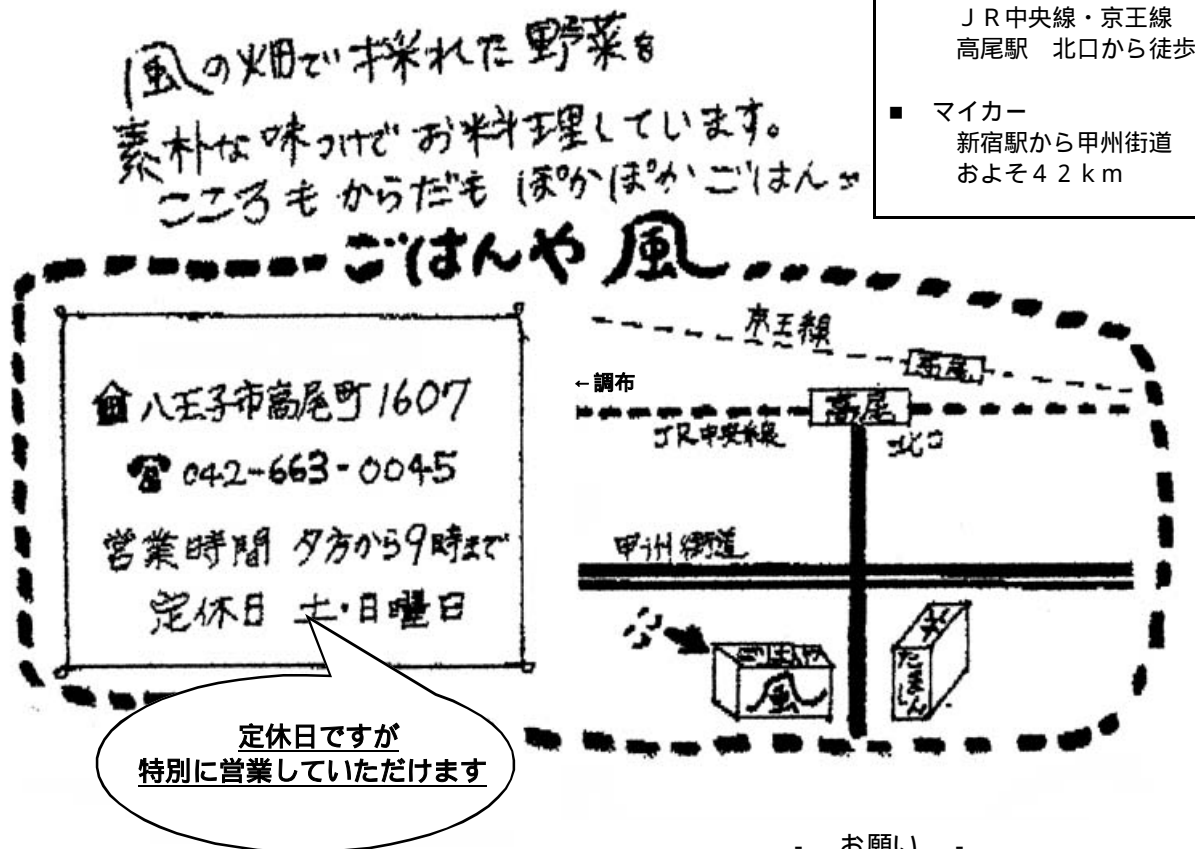
人

担当：窪田

e-mail e_kubota@jaec.org

TEL：03-5703-0254

FAX：03-5703-0255



投書コーナー

- 会員の皆様のご意見をお寄せください -

F I Aの活動やF I Aニュースで取り上げてほしい話題などなんでも結構です

お名前

電子メール